

◁年会・合同シンポ報告▷

## 第8回日本放射光学会年会・ 放射光科学合同シンポジウム

実行委員長 並河 一道 (東京学芸大学)

表記年会・合同シンポジウムが、1月10日から1月13日まで、つくば市の高エネルギー物理学研究所を会場にして開催された。この年会・合同シンポジウムは日本放射光学会が主催し、高エネルギー物理学研究所放射光実験施設、東京大学物性研究所軌道放射物性研究施設、分子科学研究所極端紫外光実験施設、日本原子力研究所・理化学研究所大型放射光施設計画推進共同チーム、PF懇談会、INS-SOR同好会、SPring-8利用者懇談会が共催して行われた放射光科学関係施設・団体によるわが国最初の合同集会である。この合同集会の運営は、最初にこれらの学会・施設・利用者団体の代表によって組織委員会を構成し、この合同集会の進め方を討議し、目的・内容・規模・日時・場所等のだまかな方向づけを行った上で、実施の権限と責任を実行委員会に引き継ぐ方法によって行われた。都合3回の組織委員会と5回の実行委員会を経て、盛況の内にこの年会・合同シンポジウムを開催することが出来たのは、ひとえに実行委員各位および日本放射光学会事務局各位の努力と会場となった高エネルギー物理学研究所関係各位の配慮に依るもので、これらの方々に衷心より感謝したい。また、展示に参加いただいた各企業に対しても厚く御礼申し上げたい。

今回の年会・合同シンポジウムは特別講演、企画招待講演、企画セミナー、口頭研究発表、ポスター研究発表、施設報告、各施設・団体固有の集会、懇親会および企業展示からなり、これらが4日間にわたって行われた。研究発表数は280件を

越え、参加者数も456名に達し、予稿集が不足する程の盛況であった。また、企業の展示も26小間用意した展示ブースが足りなくなる程多数の申し込みをいただいた。

本年会・合同シンポジウムの初日は午後から受付を開始し、INS-SOR同好会が開かれ、ポスターレビュー・共同利用実験のトピックスの紹介・高輝度光源計画の報告・討論等が行われた。この日の夕方から夜にかけては各種委員会のミーティングが行われた。2日目は、朝方にUV-SOR利用者会議が開かれ、報告・討論等が行われた。その後には用意されていた井口日本放射光学会会長の挨拶は井口会長の都合で日本放射光学会総会で行うこととし、特別講演に移った。

特別講演は生理学研究所の江橋節郎先生とコーネル大学のバターマン先生にお願いした。江橋先生は「ささやかな科学」という演題で講演され、幾人かの偉大な自然科学者の研究者としてのあり方を考察することによって自然科学の研究の本質は“ささやかな科学”であることを述べられた。素粒子物理学は“ささやかな科学”であるが、放射光科学“ささやかな科学”であろうかという問いかけがあったように思われた。一方、バターマン先生は「The Darwin Curve Re-Visited」という演題で講演され、ダーウィン流のX線の動力学回折理論の立場から見ると結晶によるX線の屈折率は散乱の効果によって生ずるもので、また、X線の全反射は0次のプラグ反射として理解できることを強調された。このような視点は、X線回折

の物理的側面を強調するもので、将来、コヒーレントX線の量子光学の研究を展開する際に有効性を発揮するものと思われる。

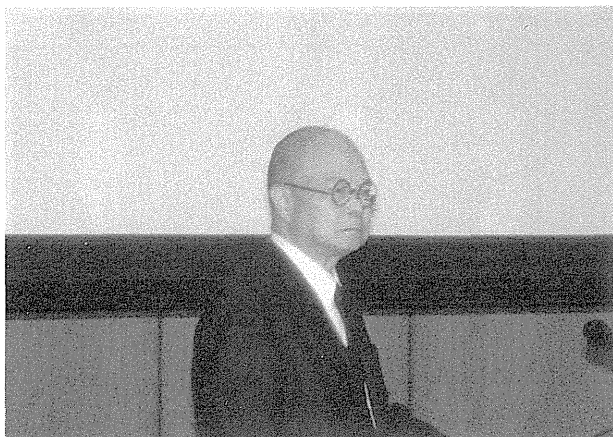
特別講演の後には、海外で高輝度光源の利用が始まり、我が国でも高輝度光源の建設が進み、放射光科学の世界にはこれまでとは質の異なる研究分野が萌芽しつつある現状に立って企画された二つの講演会「VUV-SX分野の最近の動向-VUV-11に向けて」と「コヒーレントX線を用いた研究の展望」とが併行して行われた。同日午後は、一回目のポスター発表が3会場にわかれて行われた。ポスターボードは一回当たり3会場で合計108枚用意したが、ポストデッドラインポスターも含めボードの余りがない程までに発表の申し込みがあり、幾人かの人には口頭発表をお願いした。一回目の口頭発表は、ポスターの後、5会場に分かれてそれぞれ5件ずつ発表された。この口頭発表も盛況で、会場によっては椅子を追加しても席が不足し、立って発表を聞く人もあり、参加者には大変迷惑をかけた。その後、レクチャーホールで日本放射光学会総会が開かれた。井口会長の挨拶があり、議事・報告が行われ、冨家次期会長および次期各幹事の紹介があった。

総会の後、職員会館のレストラン“然”で本年度・合同シンポジウムの参加者および招待者による懇親会が渡辺組織委員長司会で行われた。井口日本放射光学会会長の挨拶の後、実行委員会を代表して筆者が歓迎の挨拶を行い、菅原高エネルギー物理学研究所所長の挨拶につづき、冨家日本放射光学会次期会長の音頭で乾杯を行い、宴に入った。懇親会は最初200名の出席者を予定し、会場として二部屋を準備し料理・飲物を用意していたが、出席者数が見積りより少なかったため一部屋に会合することが出来、料理・飲物も豊富にあり、話がはずんで宴は当初の予定を大幅に越え午後9時までつづいた。

年会・合同シンポジウムの3日目は、最初に、第3世代高輝度光源に関連した最近の放射光技術の進歩について「放射光技術の話題」という企画のセミナーを行った。これに続いて二回目の口頭発表が5会場に分かれて行われ、それぞれ10件ずつの発表があった。その後昼まで、二回目のポスター発表が3会場で行われた。午後の最初は、各施設の代表者による施設報告が行われ、それぞれ自分の施設の現状の報告を行い、今後の予定と展望を述べ利用者にアピールした。

この日の夕方から夜にかけてと4日目の午前中はPFシンポジウムが行われた。PFシンポジウムでは、ビームラインのチェックアンドレビュー・PACのあり方・S課題・PF各部門の現状・PFの将来と高エネルギー研の機構化等について報告が行われ、質疑応答があり活発に議論がなされた。4日目の午後にはSPring-8利用者懇談会総会が開かれた。各幹事報告の後、先行ビームラインの現状、財団をめぐる最近の動きと将来、ビームライン建設の今後の課題等について報告が行われ、質疑応答が行われた。SPring-8利用者懇談会総会を最後に4日間にわたった第8回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムは成功裏に無事終了した。

今回の年会・合同シンポジウムは参加者数、研究発表数のいずれをとっても前回までの日本放射光学会およびPFシンポジウムに倍増する規模の集会となり、基本的に合同開催の方向が支持されたように思われる。しかしながら、反面、個々の施設が、その施設独自の研究成果に基づき、利用者と施設固有の学問上および運営上の問題を議論し、その加速器・光源との関係において発展の方向を見いだしていくという施設本来のシンポジウムの姿が薄れたことは否めず、2年後の年会・合同シンポジウムの見直しとも関連してこれは今後に残された課題のように思われる。



特別講演 江橋節郎 先生



特別講演 B. W. Batterman 先生

<第8回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム>

懇親会風景





